

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006 年度～2008 年度
 課題番号：18520587
 研究課題名（和文） 八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究
 研究課題名（英文） Basic research on the development process of the burial methods of the Kofun Period in the coast of the Yatsushiro Sea located on the western Kyushu Island, Japan
 研究代表者
 杉井 健（SUGII TAKESHI）
 熊本大学・文学部・准教授
 研究者番号：90263178

研究成果の概要：九州島西部に位置する八代海沿岸地域は前方後円墳分布域の南西端にあたる。すなわち、古墳時代という国家形成期における周辺地域であるが、埴輪や甲冑などの中央政権に直結する要素が当地域にどのように受容されたのかを具体的に示すことができた。さらに、未報告資料や検討が不十分なかつての報告資料を徹底的に整理・検討し、報告することができたことは、文化財を広く公開し活用するという面でもきわめて重要な成果である。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2006 年度 | 1,200,000 | 0 | 1,200,000 |
| 2007 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2008 年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,500,000 | 690,000 | 4,190,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：八代海、千崎古墳群、カミノハナ古墳群、松橋前田遺跡、横穴式石室、箱式石棺、埴輪、武器武具

1. 研究開始当初の背景

九州島の西部には、2つの内海が南北に並んで存在する。北は有明海、南は八代海である。北の有明海沿岸地域については、環有明海首長連合論が提示されていることからわかるように、古墳時代墓制の研究は大変さかんである。しかし、南の八代海沿岸地域については、けっして活発な状況にあるとは言いがたい。たとえば、八代海沿岸地域では、地下式板石積石室墓や肥後型横穴式石室、装飾古墳など地域色の濃い墓制が発達するが、それら在地墓制の発達過程にはいまだ不明な

点が多いのである。また、そうした埋葬施設の発生メカニズムを考えるうえで鍵となるであろう箱式石棺についてもほとんど研究が行われていない。こうした状況を何とか打破したいと考えたのである。

八代海沿岸地域は、前方後円墳築造域の南西端にあたる。したがって、当地域は、中央政権の動向と密接に関連する前方後円墳などの墓制と地域独自の墓制を比較検討し、中央と地方がどのような関係性をもったうえで国家的まとまりが形成されたのかについて、具体的に考察しうるきわめて有力な地域

である。つまり、八代海沿岸地域の在り墓制の様相を明らかにすることは、日本の国家形成過程の解明というより大きな研究課題にも直結するのである。本研究に取り組むことを決めた背景には、このような将来展望を有していた。研究の最終年度を終えた今、こうした思いはさらに強くなっている。

2. 研究の目的

(1)八代海沿岸地域の在り墓制にかんする基礎的データを収集・整理し、その発生と発展過程を実証的に検討する。

(2)八代海沿岸地域の在り墓制のなかに、中央政権にかかわる要素がどのように受け入れられ、あるいは受け入れられないのかについて、具体的な考古資料を用いて検討する。

(3)こうした検討作業を通じて、古墳時代に八代海沿岸地域が果たした役割について考察する。

3. 研究の方法

(1)八代海沿岸地域のうち、天草島嶼部の資料として上天草市カミノハナ古墳群出土遺物を取り上げ、その整理・実測・分析を実施する。これにより、古墳時代中期に埴輪や武器武具が当地域に受容された様相の一端を明らかにする。

(2)八代海沿岸地域のうち、八代平野部の資料として宇城市松橋前田遺跡A地点出土埴輪を取り上げ、その整理・実測・分析を実施する。これにより、当地域における竈窯焼成技術導入後の埴輪動向の一端を明らかにする。

(3)天草北部島嶼域に所在する上天草市千崎古墳群の発掘調査を実施し、当地域における横穴式石室および箱式石棺の実体を解明する。

(4)研究代表者杉井健1人では、研究目的を達成するうえで大きな困難がともなうと予想されるため、熊本県を中心とした10人の古墳時代研究者に研究協力者としての参加を頼み、彼らとともに上記1～3の調査・分析を進める。

(5)研究協力者とともに八代海沿岸地域に所在する古墳を実地に調査し、その動向の把握に努める。さらに、それぞれの研究協力者に研究課題にそったテーマで個別に研究を進めていただき、幾度かの共同討論を経て、研究成果報告書にまとめる。

4. 研究成果

(1)カミノハナ古墳群1981・1982年調査出土資料のほとんどを再整理・実測し、報告することができた。これにより、既報告書の誤りを多く訂正することができ、良質な実測図・写真を提示することができたと思う。明らかになった論点は多々あるが、出土遺物の検討から、1・2・3・6号墳の時期が示された点は重要である。それによれば、埴輪をもつ1号墳はTK208(～TK23)型式期、2号墳はTK23型式期、横剗板鋸留短甲をもつ3号墳はTK47型式期、6号墳は古墳時代後期中葉頃に位置付けられる。一方、古墳群の実地調査の成果として、現状における横穴式石室平面プランが示された点も重要である。それにもとづけば、古墳の築造順序は1号墳3・4号墳2号墳5・6号墳と予想され、出土遺物からみた2号墳の時期とは不整合である。この点は今後の重要な検討課題であるが、さらに、今回の成果を基礎として出土遺物の保存処理が早期にはかれることを望みたい。

(2)松橋前田遺跡A地点出土円筒埴輪のうち、ほぼ完形に近い状態に復元することができたものについて整理・実測し、報告することができた。松橋前田遺跡が調査されたのは、今から40年以上も前の1965年のことであるが、今日まで、その出土埴輪が正式に報告されることはなかった。今回、そのすべてではないが、正式に実測図と写真を提示することができた点は、古墳時代研究のみならず、文化財の公開・活用においても資するところ大であると考えられる。

当資料は川西編年期、須恵器編年ではTK208～23型式期に位置付けられるが、出土状況をみると、ほぼ完全なかたちを保持したまま検出されているものが少ないことがわかる。また、当資料とほぼ同じ特徴を有す円筒埴輪が、ごく近くに所在する松橋大塚古墳から検出されている。こうした状況を根拠に、松橋前田遺跡は松橋大塚古墳へ樹立するための埴輪が前もって集められた場所ではないかと推測された。

(3)千崎古墳群に所在する26基の古墳のうち、5号墳、10号墳、25号墳の発掘調査を実施し、5号墳の埋葬施設はごく狭い羨道を有す横穴式石室であること、10号墳の箱式石棺はきわめて精緻に造られていること、25号墳は長さ64cmのごく小さな箱式石棺であることなどを明らかにした。なかでも、5号墳の横穴式石室は、その上半部が破壊されているものの、羨道や前庭部の様相から出現期の横穴式石室であると推測でき、今後、天草島嶼部におけるこの種の石室の発展過程を考えるうえで必須の資料となることは間違いない。

(4)千崎古墳群の調査に関連し、古城史雄(研究協力者)によって天草島嶼部における横穴式石室の動向が、また、島津屋寛(研究協力者)によって熊本県内の箱式石棺の様相が示された。とくに、千崎10号墳にみられるきわめて精緻な加工が施された砂岩製の箱式石棺を「千崎型箱式石棺」とすることが提唱された点は重要である。なぜなら、この種の箱式石棺は石障系横穴式石室の発生に密接にかかわっていると予想されるからで、今後、さらに詳細に千崎型箱式石棺と石障の関係について検討がなされる必要がある。

(5)以上のほか、研究協力者によって提示された研究成果は数多い。なかでも、八代海沿岸地域における円筒埴輪と甲冑の動向が明らかにされた点は、中央政権に密接にかかわる要素が当地域にどのように受容されたのかを考察するうえできわめて重要である。興味深いのは、帯金式甲冑と川西編年期の埴輪の分布に相違がみられる点で、両者の伝播・受容形態が異なっていた可能性を示唆する。今後、こうした点を意識しながら、検討が継続されなければならない。

(6)前方後円墳分布域において、八代海沿岸地域は南西の端である。今回、当地域の古墳時代中期の様相については一定程度明らかにすることができたと考えが、今後は、ほかの前方後円墳分布域周縁との比較検討がなされる必要がある。たとえば、前方後円墳分布域西端の長崎県地域、また南東端の大隅半島、目を北に転じれば北端の岩手県南部地域あるいは朝鮮半島南西部地域、さらには前方後円墳が分布しない高知県地域などとの比較検討が重要である。こうした研究に発展させることを通して、日本列島における国家形成過程の解明を目指したいと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

杉井 健、「八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の特質とその検討課題」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、231-238頁、査読無
古城史雄、「天草の横穴式石室」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、111-124頁、査読無
島津屋寛、「熊本県下の古墳時代箱式石棺」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地

墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、125-156頁、査読無

木村龍生、「熊本県地域における須恵器の受容と展開」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、157-170頁、査読無

竹中克繁、「甕窯焼成円筒埴輪生産の地域的様相 - 八代海沿岸地域の事例 - 」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、171-182頁、査読無

前田真由子、「熊本県出土人物埴輪にみる製作方法」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、183-194頁、査読無

西嶋剛広、「天草北部島嶼域出土甲冑の検討」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、195-205頁、査読無

三好栄太郎、「両頭金具の構造と奈良県における出土例」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、207-218頁、査読無

藤本貴仁、「天草式製塩土器の形態変遷試論 - 碗部を中心に - 」、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』(熊本大学文学部発行) 2009年、219-228頁、査読無

[学会発表](計1件)

杉井 健・三好栄太郎、「天草の古墳 - 熊本県上天草市千崎古墳群の調査成果を中心として - 」、鹿児島県考古学会秋季大会研究発表会、2006年10月15日、鹿児島県長島町文化ホール

[図書](計6件)

杉井 健編著、『八代海沿岸地域における古墳時代在地墓制の発達過程に関する基礎的研究』、熊本大学文学部、2009年、本文238頁・図版50頁

杉井 健監修、一本尚之・高濱美來編、「千崎古墳群第7次調査報告」『考古学研究室報告』第44集、熊本大学文学部考古学研究室、2009年、1-28頁

杉井 健監修、山野ケン陽次郎・有馬絢子編、「千崎古墳群第6次調査報告」『考古学研究室報告』第43集、熊本大学文学部考古学研究室、2008年、1-36頁

甲元眞之・杉井 健編著、『上天草いにしえの暮らしと古墳』、熊本県上天草市、2007

年、123-345・349-353 頁

杉井 健監修、三好栄太郎・仙波靖子編、
「千崎古墳群第5次調査報告」『考古学研
究室報告』第42集、熊本大学文学部考古
学研究室、2007年、1-36頁

杉井 健監修、三好栄太郎編、「桐ノ木尾
ばね古墳実測調査報告」『考古学研究室報
告』第42集、熊本大学文学部考古学研
究室、2007年、37-54頁

6．研究組織

(1)研究代表者

杉井 健 (SUGII TAKESHI)
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：90263178

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

木村 龍生 (KIMURA RYUSEI)
熊本県教育委員会・文化課・学芸員
島津屋 寛 (SHIMAZUYA HIROSHI)
熊本市教育委員会・文化財課・嘱託職員
高木 恭二 (TAKAKI KYOJI)
宇土市教育委員会・文化課・課長
竹中 克繁 (TAKENAKA KATSUSHIGE)
宮崎市教育委員会・文化財課・学芸員
西嶋 剛広 (NISHIJIMA TAKAHIRO)
宮崎市教育委員会・文化財課・学芸員
藤本 貴仁 (FUJIMOTO TAKAHITO)
宇土市教育委員会・文化課・学芸員
古城 史雄 (FURUSHIRO FUMIO)
熊本県教育委員会・玉名教育事務所・主幹
前田 真由子 (MAEDA MAYUKO)
熊本県教育委員会・文化課・学芸員
牧野 幸子 (MAKINO YUKIKO)
熊本市教育委員会・文化財課・嘱託職員
三好 栄太郎 (MIYOSHI EITARO)
香芝市教育委員会・生涯学習課・嘱託職員